

哲學神髓一家言

子爵 渡邊國武 著

講述概観

本講述を其緒論に於て哲學の概

義第一章及び哲學研究の區分(第二章)を定め

本論第一部に於て歸納的哲學(自第三章至第

八章)第二部に於て演繹的哲學(自第九章至第

十四章)第三部に於て現象哲學(自第十五章至

第二十章)第四部に於て規範哲學(自第二十一

章至第二十六章)を講述し結論に於て本哲學

系統全体の聯絡及び哲學研究全体の結果(第

二十八章)を明らかにし之と完成しよの事

有る

緒論

第一章 哲學ノ概観

定説

第二十八章 哲学研究全体ノ結果

定説 關係ノ外ニモノ無シ一切ハ關係ナリ而

シテ關係自性ハ一顯ノ明珠ノ表面ノ如ク到ル

處中心ニ非ル無ク到ル處四邊ニ非ル無シ有シ

ニ無ニシテ有ナルト同時ニ一ニシテ多々ニ

シテ一ナリ一切ノ宇宙觀ハ之ニ依テ存シ一切

ノ人生觀ハ之ニ依テ起ル

證明 第一節 前各章各節ヲ於テ我義トシ

テ其研究ノ區分トシテ(緒論)客觀的方面ニ於

テ主觀的方面ニ於テ歸納的哲学ニ於テ論

繹的哲学ニ於テ現象的哲学ニ於テ規範的

哲学ニ於テ(本論)又本哲学系統全体ノ聯絡ト

シテ(結論)講述トシテ一切ハ宇宙

觀ニ依テ存シ一切ノ人生觀ハ因テ起ル所の

窮極的原理ト其本質トシテ就テ其玄妙不可思

議不可言説ナル蘊奥ト發揮シテ本講述ト完

結ルもの下有リ元来此全宇宙一切萬有の窮

極的原理ト可説部分ト云フ空間的時間

的ノ原因ト結果ト推シ變動ト受動ト別

ちテ(本論)其不可説部分

東林書院

●研究の結果としてと理論的方面、契約的
方面も積極的方面も消極的方面も皆一の関
係自性より演繹せらるる^{あり}より一切は関係不
有る現象的から研究の結果としてと物理的
方面も心理的方面も社会的方面も
面も皆一の関係自性の表現^{あり}より関係
の外^{あり}に^{あり}不有る又規範的哲学研究の
結果としてと倫理的方面も論理的方面も審
美的方面も宗教的方面も皆一の関係自性より
規定せらるる^{あり}より一切は関係不有る
の^{あり}不有る従前の哲学又と宗教不原因と結果
不有るとの^{あり}実在と現象不有るとの^{あり}神と^{あり}宇宙
不有るとの^{あり}信仰と救拯不有るとの^{あり}終始^{あり}前後
とも^{あり}関係自性の力用の中^{あり}生存し^{あり}活動しつ
^{あり}其^{あり}關係自性の^{あり}理法^{あり}契機等の^{あり}何^{あり}より^{あり}を^{あり}知ら
^{あり}に^{あり}又^{あり}研究^{あり}檢覈^{あり}を^{あり}する^{あり}は^{あり}と^{あり}も^{あり}なく^{あり}して^{あり}唯^{あり}枝葉未
^{あり}流^{あり}の^{あり}是非^{あり}得失^{あり}を^{あり}執^{あり}る^{あり}係^{あり}を^{あり}擾^{あり}々^{あり}として^{あり}相^{あり}争^{あり}ふ
^{あり}る^{あり}居^{あり}ると^{あり}言^{あり}ふ^{あり}は^{あり}と^{あり}を^{あり}実^{あり}に^{あり}つ^{あり}ま^{あり}り^{あり}ぬ^{あり}次^{あり}第^{あり}不^{あり}有
る

第三節 關係自性の一類ノ明珠ノ表面ノ如

東條清



る理法と具有一不如何なる力用を以てし

東橋屋

ク到ル處中心ニ非ル無ク到ル處四邊ニ非ル
無^レ_レ^レを從前の哲学みる^ル宗教上^ニ於^テ唯一
種の假定的推想として唯一種の教推的格言
として主張せられたる所の宇宙觀又^ニ人生觀
の根本的基礎を經驗的論理的に證明せ^ル所
の最も必要なる證明を有^ス

第一の目的

東洋の系統

の相和

せん

と

す

す

す

す

す

本邦の系統は、印度系統と解脫問題を解決せん

る所の意力と以て動機とあり

第二なる希臘系統と宇宙問題を解決せん

る所の智力と以て動機とあり

第三なる支那系統と倫理問題を解決せん

情力と以て動機とあり

第四なる猶太系統と救拯問題を解決せん

る所の信力と以て動機とあり

本邦の系統は、東洋の系統の相和

第一なる哲學と宗教とを調和す

第二なる哲學と神學とを調和す

第三なる哲學と宗教とを調和す

第四なる哲學と系統の異同を調和す

東洋の系統

の相和

せん

と

す

す

す

す

す

す

す

す

本邦の系統は、東洋の系統の相和

東洋の系統

の相和

せん

と

す

す

す

す

す

す

す

す

本邦の系統は、東洋の系統の相和

東洋の系統

の相和

せん

と

す

す

す

す

す

す

す

す

東洋の系統